

## (2) 14年度研究のまとめ

日々の学習の中で味わう「できた」「分かった」という満足感や達成感の積み重ねが子供の確かな力となり、それが次の学習への意欲となる。本校では「基礎・基本の確実な習得」を重点目標に掲げ、「どの子にも分かる喜びを味わわせる」ことを校内研究の最重点課題として取り組んできた。

特に今年度は、算数の「習熟度別グループ指導」や「ボランティアティーチャー」の活用など、子供一人一人の力に合った指導方法の工夫と改善に取り組んできた。また一方では、基礎学力育成のためのスキルタイムを充実させ、年間を通して百ます計算や読書、漢字等の徹底反復練習を全学年で継続・実践してきた。

その結果、年度末に実施した観点別学力検査CRT-IIIでは、どの学年も全国平均を上回り、基礎学力を大きく向上させることができた。また、学習意欲の面でも「自分の力を伸ばそうと努力する」「むずかしい問題でもあきらめないで解いている」など学習に対する根気強さや粘り強さが育っていることが意識調査で明らかになった。

「習熟度別グループ指導」は、これまで「児童に差別感や上下意識を持たせる」といった理由からある種タブー視されてきた。しかし、実際に行った意識調査では、ほとんどの児童や保護者がこうした指導体制を肯定的に受けとめていることがわかり、懸念された児童の上下意識の問題も年間を通して見られなかった。むしろ子供の学習意欲の向上やC R T検査の結果が示すように、学力差の大きい実態の中では大変有効な手立てであったといえる。

一方、今年度は習熟度別グループ指導を学校全体のシステムとして確立するための体制づくり、運用上の課題解決、職員の共通理解といったことなどに多くの時間が費やされ、指導法そのものの改善といった視点での研修は十分とはいえない面があった。特に習熟度別のグループ編成でも各グループ内における児童の学力差はなお存在するため、それにどう対応しながら子供一人一人の力を確実に伸ばすことができるかという、いわば1時間1時間の授業の質を高めていくことが次年度の最大の課題であるといえる。

加えて、年度末の話合いの結果、次年度は6年生において「教科担任制」を導入することをすでに決定している。算数の習熟度別グループ指導の継続実践と合わせ、教師の専門性や得意分野を生かした授業を展開し、児童にとってより興味・関心のもてる授業作りを推進しながら、算数以外の教科においても基礎・基本の徹底を図りたい。

今年度の研究と成果と課題を踏まえながら、学力保証と成長保証という学校の本来的な役割に十分な成果をあげ、保護者の期待と信頼に応えたい。